

学校図書館活用の 考え方と実践事例

資料・情報の活用で学びを深めるために

堀川 照代

[編著]

樹村 房

はじめに

「情報教育は学校図書館から始めればいいですね」と、25年ほど前に最先端の情報教育を実践されていた小学校の先生がおっしゃいました。やっとな、この言葉が実感をもってとらえられる時期がきたように思います。

2020年度からの1人1台端末の導入とコロナ禍が、各学校において学校図書館の利用を減少傾向にさせてきたことは事実です。調べ物は、教室からのインターネット検索で事足りるとする教員もいます。PISAでは、2015年から筆記型調査がコンピュータ使用型調査(CBT)へと移行し、生成AIが小学校の授業においても使用されるようになりました。

このような状況に直面している学校図書館に関わる方々と一緒に、本書を通して学校図書館の存在意義を改めて考えたいと思います。本書は、学校図書館に関わる研究者、司書教諭や学校司書等の学校関係者、公共図書館関係者の方々から、さまざまな面における理論や実践報告をいただきました。学校図書館の可能性は工夫次第であり、情報教育は、学校図書館担当者とICT担当者の協力が不可欠だと改めて感じました。

本書を、学校図書館関係者を始め、学校の管理職や教員、ICT教育担当者、資料・情報の活用に関心のある方々に手に取っていただきたいと思います。資料・情報のデジタル体も印刷体も扱う学校図書館の意義が広く認識され、学校図書館活用つまり資料・情報活用により、児童生徒の学習の基盤となる資質・能力が育成されることを願っています。

資料・情報の活用は、学校図書館の①読書センター機能、②学習センター機能、③情報センター機能に対応して、大きく3つのタイプに分けることができます。①まず、読書における資料・情報の利用は、読む力や国語力を高めます。特に物語体験を通して登場人物の感情を体験し他者理解を深め、場に応じた表現力を身につけていきます。②次に、授業における資料・情報の活用、例えば18歳成人について考える社会科単元では、多様な考え方や長所・短所、海外の状況等を資料をとおして知ることができ、それをもとに自分の考えを広げたり深めたり、他者と情報共有したりすることができます。③さらに、資料や情報を利用した探究的な学びにおいて、探究のプロセスを繰り返し経験することで、探究のステップを身につけ、未知の状況であっても推論によって自分で探究プロセスをつくりだすことができるようになり、情報スキルを獲得していきます。

資料・情報の利用は「巨人の肩の上に立つ」と表現されるように、ゼロから出発するのではなく、先人の知識の上に新しい知識を積み重ねていくことができるのです。そこが、体験学習と異なる点です。資料・情報利用は地理的にも時間的にも超越したものであり、他者の視点を取り入れることができます。これに比して、観察や実験等の直接体験は、そ

の場の現実時間のなかで行われるものであり、自己の視点から出発するものです。

また、内容的には同一の資料・情報であっても、デジタル体と印刷体では空間性や操作性が異なり、脳に及ぼす影響に違いが生まれると言われます。言語脳科学者の酒井邦嘉氏は『デジタル脳クライシス：AI時代をどう生きるか』（朝日新聞出版、2024）で、PISAの言語課題などの物語や解説文を紙で読むグループとパソコンの画面で読むグループに分けて、読後に内容の理解度を問うテストをした実験を紹介しています。結果は、紙で読んだグループのほうが成績が高かったということです（p.103）。酒井氏はまた、「自分で考える前に（ネットで）調べてしまうことが常態化するのが『検索依存症』です」と述べています（p.27）。

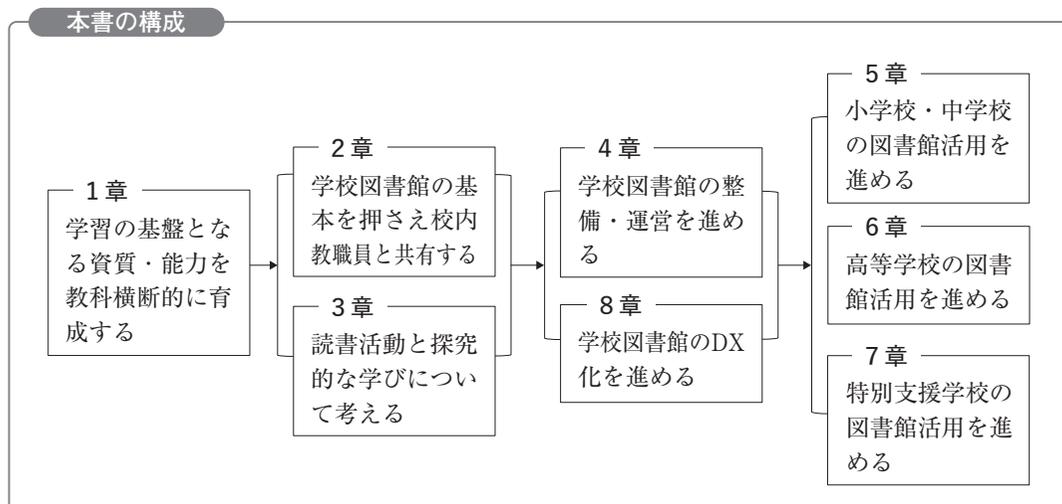
なお、「情報活用能力」と「情報リテラシー」の原語は、1章で述べたように両方とも「information literacy」ですが、わが国では少々意味が異なる語として使用されています。図書館界では、情報リテラシーの語が見かけられることが多くなったように思われますが、本書では、執筆者の語の使用を尊重し、表記の統一は図らなかったことを付言しておきます。

下図は、本書の構成図です。1章を総論とし、2・3章で基本的知識を押さえ、4・8章で学校図書館の整備を考え、5～7章で校種ごとに学校図書館活用の事例を紹介しています。全体にわたって事例を多く挙げることで、理解がより進むことを意図しました。

最後に、本書を執筆してくださいました皆さまに心より感謝申し上げます。同時に、本書の刊行に当たってお世話になりました樹村房の大塚栄一様と安田愛様に深謝申し上げます。

2025年6月

編著者 堀川 照代



学校図書館活用の考え方と実践事例

資料・情報の活用で学びを深めるために

もくじ

はじめに	i
本書の構成	ii
学校基礎データ	viii
1 章 学習の基盤となる資質・能力を教科横断的に育成する	
1.1 学習の基盤となる資質・能力	2
1.1.1 「学習の基盤となる資質・能力」と「教科等横断的な視点」	2
1.1.2 「読む力」が学びのすべての基盤	3
1.1.3 「図書館を使う力」は構造化思考を深める	6
1.1.4 「情報活用能力」は自ら学ぶ力	8
1.2 情報活用能力は計画的・系統的に育成する	10
1.2.1 探究的な学びの意義	10
1.2.2 情報活用能力の年間指導計画の作成と利用	12
1.3 学習の基盤となる資質・能力を協働で育成する	20
1.3.1 学校図書館担当者と情報担当者の協働 ——杉並区立桃井第三小学校（東京都）	20
1.3.2 学校図書館と公共図書館の協働による町の図書館活用教育 ——長野県下伊那郡高森町	24
2 章 学校図書館の基本を押さえ校内教職員と共有する	
2.1 学校図書館の機能	30
2.1.1 学校図書館法	30
2.1.2 学校図書館の3つのセンター機能	30
2.1.3 司書教諭と学校司書の役割	31
2.2 学校図書館活用の必要性	33
2.2.1 「学校図書館活用」と「教育の情報化」	33
2.2.2 教科等における資料・情報活用	34
2.2.3 学校図書館から提案できるカリキュラム・マネジメント	35
2.2.4 学校図書館は教育のインフラ	37

2.3	学校図書館の基本を校内教職員と共有する	38
2.3.1	教職員へのアピール：職員会議等を通じて	38
2.3.2	校内研修のすすめ	42

3章 読書活動と探究的な学びについて考える

3.1	読書活動の支援	48
3.1.1	読書活動の推進	48
3.1.2	読書の位置づけ	49
3.1.3	読書センター機能の活用	50
3.1.4	読書活動から読書へ	51
3.2	読む力の育成	53
3.2.1	全校的見地からの読書指導・読書活動	53
3.2.2	教科等における読書指導・読書活動の支援	53
3.2.3	学校図書館主体の読書指導や読書活動	55
3.3	考えるための技法・思考ツールの活用	56
3.3.1	考えるための技法と思考ツール	56
3.3.2	情報と情報との関係づけ	57
3.4	探究のプロセス	61
3.4.1	探究とは何か	61
3.4.2	探究のプロセス：①課題の設定	63
3.4.3	探究のプロセス：②情報の収集	65
3.4.4	探究のプロセス：③整理・分析	68
3.4.5	探究のプロセス：④まとめ・表現	69
3.5	情報活用能力の育成	71
3.5.1	情報活用能力の育成の場	71
3.5.2	探究的な学びのレベル	71
3.5.3	探究的な学びにおける指導・支援	72
3.5.4	探究的な学びの評価	73
3.5.5	探究的な学びやベストミックスをめざす工夫	74

4章 学校図書館の整備・運営を進める

4.1	学校経営と学校図書館の運営	76
4.1.1	学校経営における学校図書館	76

4.1.2	学習の基盤となる資質・能力の全校的育成	76
4.1.3	学校図書館の運営	78
4.1.4	学校図書館担当者の職務	80
4.1.5	特別な支援を必要とする子どもたち	81
4.2	学校図書館の施設・設備，資料の整備	84
4.2.1	学校図書館整備の基本	84
4.2.2	小学校図書館の整備——甘楽町立福島小学校（群馬県）	87
4.2.3	中学校図書館の整備 ——神戸市立小部中学校（前任校：神戸市立本多聞中学校）	90
4.2.4	高等学校図書館の整備	93
4.2.5	知の拠点としてインプットからアウトプットまで ——工学院大学附属中学校・高等学校	97
4.3	学校図書館の ICT 活用：校内から町内へ ——甘楽町立福島小学校（群馬県）	101
4.3.1	学校図書館の運営面から	101
4.3.2	1人1台端末の導入（GIGA スクール構想）で広がる学校図書館	102
4.3.3	さまざまな連携・協働	103
4.4	学校図書館支援センター	105

5章 小学校・中学校の図書館活用を進める

5.1	利用指導から情報活用能力の育成へ	108
5.1.1	学校図書館利用指導と図書館クイズ	108
5.1.2	図鑑の指導のポイント	110
5.1.3	百科事典の指導のポイント	113
5.1.4	年鑑の指導のポイント	116
5.2	読書の支援・指導	120
5.2.1	小学校の読書指導・読書活動——甘楽町立福島小学校（群馬県）	120
5.2.2	中学校の読書指導・読書活動 ——神戸市立小部中学校（前任校：神戸市立本多聞中学校）	124
5.2.3	読書活動を推進しよう	128
5.3	授業における資料・情報の活用	131
5.3.1	小学校の資料・情報活用の促進 ——高森町立高森北小学校（長野県）	131

- 5.3.2 中学校の資料・情報活用の促進
 ——神戸市立小部中学校（前任校：神戸市立本多聞中学校） 135
- 5.3.3 資料・情報活用を促進しよう 138

6章 高等学校の図書館活用を進める

- 6.1 学校図書館の魅力づくり ————— 144
- 6.1.1 生徒を惹きつける学校図書館
 ——京都府立丹後緑風高等学校 久美浜学舎 144
- 6.1.2 学校図書館のウェブページ活用
 ——埼玉県立浦和第一女子高等学校 149
- 6.2 学校図書館活用の促進 ————— 154
- 6.2.1 読書への入口がたくさんある図書館へ——福井県立武生東高等学校 154
- 6.2.2 探究のタネを蒔く——京都府立丹後緑風高等学校 久美浜学舎 158
- 6.2.3 探究学習の支援——埼玉県立浦和第一女子高等学校 162
- 6.2.4 学校図書館活用を支える情報サービス 166
- 6.3 カリキュラムに位置づく学校図書館活用 ————— 169
- 6.3.1 「総合的な探究の時間」と学校図書館——鳥取県立鳥取東高等学校 169
- 6.3.2 SSHの基礎を育むプログラム——茨城県立水戸第二高等学校 173
- 6.3.3 教科における「学校図書館とICT」活用
 ——京都先端科学大学附属中学校高等学校 177

7章 特別支援学校の図書館活用を進める

- 7.1 特別支援学校図書館の概況 ————— 182
- 7.1.1 特別支援学校とは 182
- 7.1.2 特別支援学校の図書館 182
- 7.1.3 特別支援学校図書館の選書 183
- 7.1.4 特別支援学校（知的障害）における学校図書館活用 184
- 7.2 特別支援学校図書館の整備と活用 ————— 185
- 7.2.1 特別支援（視覚障害）学校図書館の整備と活用
 ——横浜市立盲特別支援学校 185
- 7.2.2 特別支援（聴覚障害）学校図書館の整備と活用——山梨県立ろう学校 189
- 7.2.3 特別支援（肢体不自由）学校図書館の整備と活用
 ——東京都立八王子東特別支援学校 193

7.2.4 県立図書館の特別支援学校への支援——埼玉県立久喜図書館 196

8章 学校図書館のDX化を進める

8.1 学校図書館のDX化をどう進めるか 202

8.1.1 学校図書館DXとは 202

8.1.2 東京都立南多摩中等教育学校の学校図書館DX 203

8.1.3 学校図書館DXを進めるためには 204

8.2 学校図書館で活用できるICTの知識と技術 205

8.2.1 学校図書館からのICTを活用した情報発信 205

8.2.2 学校図書館業務に役立つアプリ 209

8.2.3 学校における著作権 211

リンク集 213

さくいん 214

執筆分担 (敬称略)

1章	4章	6章
1.1 堀川照代	4.1 堀川	6.1 6.1.1 伊達深雪
1.2 1.2.1 堀川	4.2 4.2.1 堀川	6.1.2 木下通子
1.2.2 鎌田和宏	4.2.2 小柳聡美	6.2 6.2.1 見延尚栄
1.3 1.3.1 土屋文代	4.2.3 道浦百合	6.2.2 伊達
1.3.2 宮澤優子	4.2.4 千田つばさ	6.2.3 木下
2章	4.2.5 白井理恵	6.2.4 堀川
2.1 堀川	4.3 青木いず美	6.3 6.3.1 三好明美
2.2 堀川	4.4 堀川	6.3.2 勝山万里子
2.3 2.3.1 佐藤敬子	5章	6.3.3 伊吹侑希子
2.3.2 林 良子	5.1 5.1.1 堀川	7章
3章	5.1.2 塩谷	7.1 堀川
3.1 塩谷京子	5.1.3 塩谷	7.2 7.2.1 野口豊子
3.2 堀川	5.1.4 塩谷	7.2.2 齋藤亜弥
3.3 塩谷	5.2 5.2.1 青木	7.2.3 毛利磨衣子
3.4 鎌田	5.2.2 道浦	7.2.4 須藤ゆみ子
3.5 堀川	5.2.3 堀川	8章 杉山和芳
	5.3 5.3.1 宮澤	
	5.3.2 道浦	
	5.3.3 堀川	

学校基礎データ

*本書に出現する小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の基礎データを出現順に一覧しています

杉並区立桃井第三小学校（東京都）

児童数：424
学級数：16（特別支援学級含む）
蔵書冊数：12,243
年間資料購入予算（万円）：100
（2024年10月現在）

工学院大学附属中学校・高等学校

生徒数：中学校 324 高等学校 825
学級数：中学校 12 高等学校 25
蔵書冊数：約3万（電子書籍除く）
年間資料購入予算（万円）：約120（雑誌・
電子書籍含む）
（2024年10月現在）

甘楽町立福島小学校（群馬県）

児童数：152
学級数：8
蔵書冊数：9,902
年間資料購入予算（万円）：40
（2024年10月現在）

高森町立高森北小学校（長野県）

児童数：99
学級数：8
蔵書冊数：9,149
年間資料購入予算（円）：784,000
（2024年10月現在）

神戸市立小部中学校

生徒数：361
学級数：17（特別支援学級2含む）
蔵書冊数：14,117
年間資料購入予算（円）：657,450（新聞含む）
（2023年4月現在）

京都府立丹後緑風高等学校 久美浜学舎

生徒数：91
学級数：6
蔵書冊数：20,586
年間資料購入予算（万円）：52
（2024年10月現在）

神戸市立本多聞中学校

生徒数：659
学級数：20（特別支援学級2含む）
蔵書冊数：9,257
年間資料購入予算（円）：664,750
（2022年3月末現在）

埼玉県立浦和第一女子高等学校

生徒数：約1千
学級数：27
蔵書冊数：約5万6千
（2024年10月現在）

福井県立武生東高等学校

生徒数：311
学級数：11
蔵書冊数：36,865
(2025年4月現在)

鳥取県立鳥取東高等学校

生徒数：827
学級数：21
蔵書冊数：約3万7千
年間資料購入予算(万円)：約174
(2024年5月現在)

茨城県立水戸第二高等学校

生徒数：960
学級数：24
蔵書冊数：44,390
年間資料購入予算(万円)：120
(2023年3月現在)

京都先端科学大学附属中学校高等学校

生徒数：中学校235 高等学校1,291
学級数：中学校9 高等学校39
蔵書冊数：38,487 電子書籍424タイトル
年間資料購入予算(万円)：240
(2024年10月現在)

横浜市立盲特別支援学校

児童生徒数：82
学級数：20
蔵書冊数：25,952
年間資料購入予算(万円)：135
(2024年10月現在)

山梨県立ろう学校

児童生徒数：32
学級数：14
蔵書冊数：約7千
年間資料購入予算(万円)：
県から8
自校PTA会費から25
(2025年4月現在)

東京都立八王子東特別支援学校

児童生徒数：147
学級数：45
蔵書冊数：約2千
年間資料購入予算(万円)：16
(2024年10月現在)

東京都立南多摩中等教育学校

生徒数：919
学級数：24
蔵書冊数：45,196
年間資料購入予算(万円)：182
(2024年3月現在)

学習の基盤となる

1.1 資質・能力

学習の基盤となる資質・能力として、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」等が学習指導要領総則に明記されている。その育成には、教科横断的な視点から教育課程の編成を図る重要性が指摘されている。

情報活用能力は計画

1.2 的・系統的に育成する

情報活用能力は「探究的な学び」を通して培われる。探究のプロセスを自らつくれること、探究プロセスに必要な情報活用スキルを身につけること、が探究的な学びの目的であり、年間指導計画を立てて育成することが効果的である。

1 章

学習の基盤となる資質・能力を教科横断的に育成する

1.3 学習の基盤となる資質・能力を協働で育成する

1.3.1 学校図書館担当者と情報担当者の協働（事例）

探究型の学習の土台となる情報活用能力育成の体系的な計画を、情報担当者（情報担当教諭）と学校図書館担当者（司書教諭と学校司書）で作成している。互いの専門性を理解し、「子どもに付けたい力は何か」という視点でねらいを明確にし目的をもって協働する。

1.3.2 学校図書館と公共図書館の協働による町の図書館活用教育（事例）

子ども読書支援センターが中心となって、公共図書館と学校司書が協働する。情報活用能力指導年間計画や教材を作成し、ネットワークにより資料の質の保証を図り、学校図書館の情報センター機能を高め、小中学校を通した包括的継続的な子ども読書を支援する。

1.1 学習の基盤となる資質・能力

1.1.1 「学習の基盤となる資質・能力」と「教科等横断的な視点」

現行の小学校学習指導要領（平成29年告示）の総則に、以下のように「学習の基盤となる資質・能力」という文言が見られる。

小学校学習指導要領 第1章 総則 第2 教育課程の編成

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

(1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

中学校、高等学校の学習指導要領では「児童」が「生徒」に置き換えられている。特別支援学校では、小学部・中学部の指導要領は上記の「児童の発達の段階を考慮し」が「児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を考慮し」に換えられている。高等部は、「児童又は生徒」が「生徒」になっているだけで、あとは同文である。

つまり、どの校種においても「学習の基盤となる資質・能力」として①言語能力、②情報活用能力、③問題発見・解決能力等を育成することが求められているのである。

本書では、上述の①～③に加えて、下記の④～⑥を「学習の基盤となる資質・能力」として考えたい。①～⑥は関連しあっており当然重なる部分がある。また、①言語能力のうち、学校図書館が大きく関わるのは「読む力」であり、「読む力」が学びのすべての基盤と考えられるため、①を読む力と置き換えて考えていく。

- | | | |
|----------|------------|------------|
| ①読む力 | ②情報活用能力 | ③問題発見・解決能力 |
| ④図書館を使う力 | ⑤資料・情報を使う力 | ⑥探究する力 |

上記の総則には、「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成

を図るもの」とある。学校図書館担当者は資料の提供を通して、各教科のねらいや授業展開を把握することができ、各教科の特徴や独自性、教科間の関連性や差異性等に気づくことができる。ゆえに学校図書館担当者は教科等横断的な視点をもつことができるのである。

1.1.2 「読む力」が学びのすべての基盤

(1) 「読む」ということ

言語脳科学者の酒井邦嘉によれば、「『読む』ということとは、単に視覚的にそれを脳に入力するというのではなく、足りない情報を想像力で補い、曖昧なところを解決しながら『自分の言葉』に置き換えていくプロセス¹であるという。加えて、「ここでいう『想像力』とは、『心的イメージ』に加えて、『自分の言葉で考える』ことだ²と説明している。

読書とは、文字どおり「書かれたものを読む」ことである。

2004(平成16)年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、「ここでいう読書とは、文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることなども含めたものである」と述べられており、この考え方は現行の学習指導要領に踏襲されている。また2000年度開始のOECDのPISA調査では、グラフ、図、写真、地図などの非連続型テキストも「読む」対象とされている。さらに、PISAでは2015年の調査からコンピュータ使用型調査に移行しており、「デジタル資料」を読むことで読解力が測られている。

「読書」つまり「書かれたものを読む」という「書かれたもの」には、さまざまな内容やさまざまな種類、形態があるということを忘れてはならない。

(2) 「紙で読む」と「デジタルで読む」

では、「書かれたものを読む」行為のうち、「紙で読む」と「デジタルで読む」という媒体の違いによる影響はあるのであろうか。

メアリアン・ウルフ (Maryanne Wolf) は認知神経科学や発達心理学等の研究者であるが、その著書『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』(インターシフト, 2020)のなかで、読字脳の発達について述べている。ウルフは、デジタルで読む脳と紙の本で読む脳の回路の発達は異なるので、それぞれの回路を切り替えて使うことができ、「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育むことの重要性を指摘している。

1 酒井邦嘉『脳を創る読書』実業之日本社, 2017, p.27.

2 同上, p.24.

「深い読み」は、共感をひきおこす。共感とは「他人の視点に立ち、その気持ちになるという行為」³であり、「共感とは知識と感情の両方を必要とします。過去の思い込みを忘れて、別の人、別の地域、別の文化と時代に対する、知的理解を深めることが必要なのです」⁴と共感の重要性を指摘する。

ウルフはデジタルで読むことを否定しているのではなく、子どもたちには両方の経験を与えることが大切であるという。しかし、懸念も示している。「次世代の深い読みプロセスはデジタル媒体によってとくに危うくなると確信しています。危うくなるのを防ぐために、子どもが画面で読み始めたらずに『対抗スキル』を教えます。とくに重きを置くのは、スピードではなく意味を求めて読むことの重要性、多くの成人の読み手が行なっている単語で見当をつけるジグザグの斜め読みを避けること、読みながら自分の理解を習慣的にチェックする（話の筋の順序や「手がかり」を確認し、記憶を詳しく話す）こと、印刷で学んだものと同じ類推と推論のスキルをオンラインのコンテンツにも展開する戦略を学ぶことです」⁵と述べている。

(3) 「紙で読む」ことで育まれるもの

ここでは、深い読みのできる「紙で読む」ことを前提として考える。「書かれたものを読む」、つまり「読書」によって育まれるものは大きく2つに分けて考えられよう。①読むという行為を通して得られるものと、②読んだ内容を通して得られるものである（図1-1）。

a. 読む行為を通して育まれるもの

①と②は区別できない部分もあるが、①には読む技術（目の動かし方、熟読・速読・黙読の方法等）や国語力（語彙力、文法、表現力等）、知性（想像力、思考力、判断力等）、情報や知識等が含まれる。

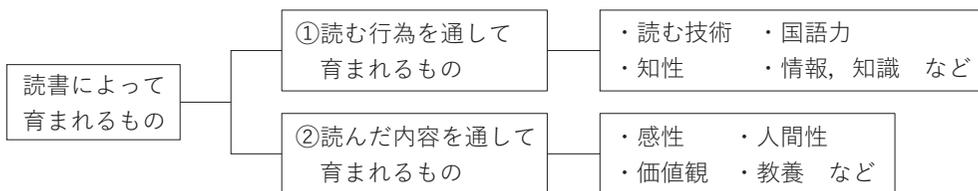


図1-1 読書によって育まれるもの

3 メアリアン・ウルフ著、大田直子訳『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳：「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』インターシフト、2020、p.61.

4 同上、p.75.

5 同上、p.238.

「表現力」として、特に挙げておきたいのが、協明子の述べる「不快感情の体験」によるものである。「子どもにいろんな不快感情をわざわざ体験させるわけにはいかないけれど、物語なら多様な体験ができる」「『感じていることを言葉でとらえる』こつをつかむのに、物語はすばらしいお手本になってくれる」⁶という（本書 p.7 コラム参照）。

b. 読んだ内容を通して育まれるもの

②の「読んだ内容を通して育まれるもの」には、感性や人間性、価値観、教養等が含まれよう。これらについては、多くの人が多様な表現で指摘している。

ウルフは、「共感」と「他の視点の獲得」を重要視する。「子ども時代の読書は何よりも、遠く離れた場所の、またはちがう大陸の、あるいは何世紀も隔たった、ほかの人々やとても愛らしい動物たちの視点を学ぶための土台になります。…(略)…このような物語で学ばれる共感、子ども時代の世界を広げ、本質的な人間の価値、『他者』との親近感と共感を教えます。」⁷と述べている。

藤原正彦は「情緒」と「大局観」を強調する。

…(略)…よく「情緒が何の役に立つのか、論理的思考こそ重要だ」という人がいます。が…(略)…、論理というものは、AならばB、BならばC、CならばDと言うように、鎖を辿ってZという結論に至ります。ところが論理の出発点のAは常に仮説であって、それが誤っていたら、いくら論理的、合理的思考を積み重ねようと、正しい答えには辿り着けない。

出発点の仮説を「選択」する際、決め手になるのがまさに情緒なのです。情緒は全人格から生まれるものであり…(略)…。人間が直接、経験できる世界の範囲はあまりにも狭い。その実体験を補って余りあるのが読書です。…(略)…

情緒に加え、人間の判断にとって重要なのは大局観であり、弱者を思いやる惻隱の情です。これらはいずれも本を読むことによって得られます。…(略)…読書を積み重ねるうちに、氾濫する情報の渦から教養や情緒や道徳や美的感性によって「まともなもの」と「下らないもの」、本質と些細を選び分ける目が養われていくのです。⁸

また石井直人は、YA文学が「感情管理の方法」を提供しているという。「思春期の一番『感情管理』の難しい時期の読者に、ある種の文学は『感情管理』の方法を提供してい

6 協明子『物語が生きる力を育てる』岩波書店、2008、pp.84-85.

7 前掲注3、p.187.

8 藤原正彦『スマホより読書：本屋を守れ』PHP研究所、2023、pp.94-96.

るのではないか⁹と述べている。これは前述の脇明子の「不快感情の体験」ともつながる。

学校教育の段階において、一生をかけて人間としての成長を続けられる準備ができるように、児童生徒には、「紙の本で読む」ことを生活の一部と感じられるような環境を整え、「紙の本で読む」ことを少しでも多く体験させたいものである。

1.1.3 「図書館を使う力」は構造化思考を深める

公共図書館であれ学校図書館であれ、図書館という物理的空間を使いこなすためには、人間が創り上げてきた「知の宇宙」がどのように分類・整理されてどのように並べられているかを知らなければならない。図書館で求める本にたどりつくためには、図書館利用の前提となる知識や技術が必要である。

分類とは、「事物を共通な性質に基づいて種類に分けること。同類のものをまとめ、全体をいくつかに分けて体系づけること」¹⁰である。図書館では、古代から分類という方法で知の世界を整理してきた。現在わが国のほとんどの公共図書館や学校図書館では日本十進分類法（NDC）によって分類され、蔵書は分類順に書架の左から右へ、上から下へと並べられる。そして書架は分類順に右回り（時計回り）に配置される。

図書館利用には、こうした日本十進分類法の構造、請求記号の意味（構造）などの資料整理の構造のほか、書架の配置、貸出カウンターや参考資料や地域資料の位置等の館内の物理的構造、全体的構造もまた、把握すべきものである。つまり分類や配架の仕組み、館内の位置が把握できて初めて、自立的に図書館を使える。

このように考えると、図書館利用はインターネット利用に比べてたいへん面倒であり、利用時において「どのように探せばよいかを考える時間が必要である」。これは「考えるプロセス」と「考える行為」があるということである。こうした構造的把握・全体的把握は、「探究する力」や「見通す力（推論する力）」等にも大きく関わってくる。

知の構造を概念としてだけでなく、物理的空間として具現化しているのが図書館である。高層ビルからは街全体の景観が見渡せるが、図書館では、館内の景観が見渡せるだけではなく、知の世界が構造化された限られた空間を把握するという体験ができる。これは、知の世界という全体像が把握できる、つまり大局観を養うことにもつながるのである。

9 石井直人「『タブーの崩壊』とヤングアダルト文学」『日本児童文学の流れ：平成17年度 国際子ども図書館 児童文学連続講座講義録』国立国会図書館国際子ども図書館，2006，p.81.

10 “分類”. 精選版 日本国語大辞典. コトバンク. <https://kotobank.jp/word/%E5%88%86%E9%A1%9E-128722>, (参照 2024-08-13).

COLUMN

物語体験で気持ちを言葉で伝える力を育てる

不快感情の体験について、脇明子『物語が生きる力を育てる』のなかで次のように述べている*。

…(略)…優れた児童文学のなかには、子ども心のなかで起こっていることがいきいきと描かれていて、感情移入しながらそれを読んでいくと、自然にさまざまな不快感情を味わうことになるものがたくさんあります。もちろん物語での体験は実体験には及びませんが、不快感情の体験にかぎっては、物語で味わうほうがいい部分も多いことがわかってきました。…(略)…現実には子どもがひどく不快感情は、そうかんたんに言葉にならないのに対し、物語では主人公の心のなかで、優れた作家ならではの的確な言葉で表現されます。物語の主人公が感じることに、子どもが現実を感じることは、もちろんおなじではありませんが、「感じていることを言葉でとらえる」こつをつかむのに、物語はすばらしいお手本になってくれるのです。

2023年度の小・中・高等学校における暴力行為の発生件数は108,987件（前年度95,426件）で過去最多という。児童生徒千人

当たりの発生件数は8.7件（前年度7.5件）となる**。

特に小学校での暴力行為が増えた理由のひとつに、増田修治（臨床教育学）は、「考えをうまく言葉で伝えられない」可能性を挙げている***。

以前、先生から教卓で試験答案を返してもらった小学生が、自分の席に戻ったとたんに、前に座っている子どもの背中をぶった、という新聞記事を見た。点数の低い答案を返してもらった気持ちを言葉に表せずに行動に訴えたのではないだろうか。子どもたちには物語体験を重ねることによって、登場人物の心情を理解し、自分の気持ちを言葉で伝える力を身につけてほしい。

* 脇明子『物語が生きる力を育てる』岩波書店、2008、pp.84-85。

** 文部科学省、令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要、2024-10-31、https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf、（参照2025-05-15）。

*** 本間ほのみ、小中高の暴力行為、初の10万件超 7割は小学生「心の叫び」の声も、朝日新聞、2024-10-31、<https://www.asahi.com/articles/ASSB00TT2SB0UTIL008M.html>、（参照2025-05-15）。

執筆者一覧

*五十音順。()内は執筆当時

- 青木いず美：高崎健康福祉大学・群馬医療福祉大学 非常勤講師
(甘楽町立福島小学校 司書教諭)
- 伊吹侑希子：京都先端科学大学附属中学校高等学校 司書教諭
- 白井 理恵：工学院大学附属中学校・高等学校 国語科 司書教諭
- 勝山万里子：茨城キリスト教大学 兼任講師
(茨城県立水戸第二高等学校 学校司書)
- 鎌田 和宏：帝京大学教育学部 教授／放送大学 客員教授
- 木下 通子：オフィスみちねこ代表／社会教育士／埼玉大学 非常勤講師
(埼玉県立浦和第一女子高等学校 担当部長兼主任司書)
- 小柳 聡美：甘楽町立福島小学校 学校司書
- 齋藤 亜弥：山梨県立ろう学校 教諭
- 佐藤 敬子：北海道教育大学 札幌校 非常勤講師／全国学校図書館協議会 学校図書館スーパーバイザー
- 塩谷 京子：放送大学 客員准教授
- 杉山 和芳：東京都立立川国際中等教育学校 学校司書／國學院大學 非常勤講師
(東京都立南多摩中等教育学校 学校司書)
- 須藤ゆみ子：埼玉県立熊谷図書館 主任司書
(埼玉県立久喜図書館 主任司書)
- 伊達 深雪：京都府立丹後緑風高等学校 久美浜学舎 学校図書館司書
- 千田つばさ：東京都立南多摩中等教育学校 学校司書
- 土屋 文代：杉並区立小学校 学校司書
(杉並区立桃井第三小学校 学校司書)
- 野口 豊子：横浜市立盲特別支援学校 図書館運営員
- 林 良子：元松江市学校図書館支援センター 教育指導講師
- 道浦 百合：(神戸市立小部中学校・小部小学校兼務 学校司書)
- 見延 尚栄：福井県立武生東高等学校 学校司書
- 宮澤 優子：伊勢市教育委員会事務局教育メディア課読書推進係子ども読書活性化担当 主幹
(長野県高森町立高森北小学校・高森町子ども読書支援センター 司書)
- 三好 明美：鳥取県立鳥取東高等学校 国語科 司書教諭
- 毛利磨衣子：東京都立八王子東特別支援学校 読書活動推進部主任教諭

[編著者略歴]

堀川 照代 (ほりかわ・てるよ)

東京大学大学院教育学研究科満期退学後、1988年4月から島根県立島根女子短期大学(現島根県立大学)、2011年4月から2020年3月まで青山学院女子短期大学に勤務。1989年から2025年まで放送大学客員。

共著に、『学習指導と学校図書館』(樹村房、2002)、『学習指導と学校図書館』(放送大学教育振興会、2010、2016)、『児童サービス論』(日本図書館協会、1998-2020)、『1人1台端末時代の学校図書館担当指導主事の仕事と知識』(全国学校図書館協議会、2021、非売品)、『どう使う? 学校図書館と1人1台端末 はじめの一步』(全国学校図書館協議会、2022)、『確かめながら学校図書館と1人1台端末 ひろがる! つながる! 学校図書館』(全国学校図書館協議会、2023)等。

学校図書館活用の考え方と実践事例

——資料・情報の活用で学びを深めるために

2025年7月30日 初版第1刷発行

〈検印廃止〉

編著者 堀川 照代

発行者 大塚 栄一

発行所 株式会社 樹村房

〒112-0002

東京都文京区小石川5-11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷/亜細亜印刷株式会社

製本/有限会社愛千製本所

© Teruyo Horikawa 2025 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-410-7 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。